ピカドン

松浦福雄

あれは後日の記録によれば、昭和20年8月9日午前11時02分。

私たち学童は1部落30人位で近くの小高い山の中腹にあるお宮で夏季集団学習をさせられていた。女性教師一人。

その時ピカッと閃光が走り、数秒してドーンと雷のような音がした。先生は「危ないから外へ出ては駄目」と叫んだ。上級生4、5人は西の空を見に外へ出ていた。その日から3日程、西の空は夜、真っ赤だった。

ここは熊本県天草、長崎市から海を隔てて直線距離で20~30kmの位置。

あれは長崎に一瞬にして7万4千人の尊い命を奪った原爆（原子爆弾）が投下された瞬間だった。

そして8月15日、母から「今から重大なラジオ放送があるから、皆聞くように」といわれ、家族皆ラジオの前に集まった。

それは戦争終結の昭和天皇陛下のお言葉だった。

子供の私には何のことも解からなかったが、母等大人は「戦争は終わった、今日から空襲もなくなり、灯火管制で明かりが漏れないように電球を布で覆う事もなく、夜も電灯を煌々と点けて良い」と喜んでいました。

それまで日本は絶対勝つとの情報しか流されておらず、子供の私たちも日本は勝つと教え込まれていた。

又、当時の食生活はコーリャン飯やサツマイモが主食だったりして悲惨だった。学校に農家の子供等が白米の弁当を持ってくると先生に注意されていた。

以上、私が小学2年生の時の体験です。

戦争は絶対駄目、今の平和を大切に願うのみです。